

院が『略論』の本文を二科に分ち、第一と第二の二番の問答を以て所生の浄土を明かし、第三問答以下は能生の品輩を論じたとする伝統をうけて、先生は「浄土の因果を明かし、特にその因につき、勸信誠疑されてある趣旨を閑却してはならない」（七一頁）と述べられる。これについて、此の疑を誡めるという点より、第三の「生<sub>ニ</sub>安樂土<sub>ニ</sub>者、凡有<sub>ニ</sub>幾輩、有<sub>ニ</sub>幾因縁」の問答と、さらに第四の胎生者や第五の疑惑心の問答に心が惹かれるが、とくに本書では「九 三輩往生の因縁」・「一〇 胎生辺地の往生」・「一一 疑惑と五智」に詳しく叙述される。

まず「三輩往生の因縁」のところには、『大経』の三輩と『観経』の九品との同異を、全く開合の相異と見た鸞師已来の伝統を解説し、さらには元祖における廃立の義から宗祖の隠頭積についても述べられる。次に「胎生辺地の往生」においては、『略論』で胎生と辺地が同じと説かれるが、さらに胎宮と併称される疑城についても、祖積の意をもとめられる。このうち『三経往生文類』に「弥陀経往生という、他力の中の自力なり。尊号を称するゆへに疑城胎宮にむまるといへども、不可称不可説不可思議の他力をうたがふ、そのつみおもくして、牢獄にいましめられて、いのち五百歳なり」とあり、その後胎宮の文が引かれてある事は、これが第二十願成就の文とされるものであって、先生は「しかも化巻の引用に照らせば、この経文は疑惑の心を以て、諸功德を修し、彼の国に生まれんと願じて、仏の五智を疑う第十九願の行者と、仏の五智を疑惑して信ぜず、なおも罪福を信じて、善本を修習して、その国に生まれんと願する第二十願の行者とが、共に胎生の往生を得ると解釈される」（一一六頁）と説かれる。

かくて、さらに「疑惑と五智」において、まず疑は不了であり、鸞師は「不了仏智」等の五句から推考して、疑を対治する方面から論述がなされたが、いま先生の教示にもとづいて、静かに本文を味読してゆくと、そこに自ずと、凡夫おにける虚妄分別の罪業、深重が内感され、そのなかに説かれる七喻を通して、仏智不思議の所以が領解される。

（東本願寺出版部発行 昭和四十一年七月 A5版 一五四頁）

#### 松見得忍 述

聖徳  
太子 法華義疏要義

坂東 性純

本書は昭和四十一年度の安居において、松見得忍嗣講が次講の講題として選ばれた聖徳太子の『法華義疏』について行なった講述の要録である。安居の講本として本疏が選ばれたのは、昭和二十五年年度の河辺慶縁擬講による同疏の講述以来これが始めてである。

松見師は、本書を単なる『法華経』の註釈とのみは考えず、日本人の思惟・精神を跡づける時、その根源となるべき著作であるという信念に基づき、宗派未分の太子仏教の性格を本疏を通して何うのに、太子が特に力を注がれた所謂四要品（方便品・寿量品・安樂行品・普門品）及びそれに関連する譬喩・信解・地涌等

の諸品を中心として考察している。そして適宜、光宅寺法雲の『法華義記』、天台大師智顛の『法華玄義』及び『法華文句』、嘉祥大師吉蔵の『法華玄論』及び『法華義疏』、慈恩大師窺基の『法華玄贊』等を参照し、大陸諸師の解釈と太子のそれとを比較対照しつつ、太子の独自の發揮のあとを探求している。太子の生涯、義疏の成立年代、『勝鬘經』・『維摩經』の註疏との関係等は本書では取り扱われていない。大陸諸師とのいわば縦の比較と並んで、太子の他二疏との横の比較は、本義疏の思想の性格を解明する上に欠くことの出来ぬ重要な課題であるが、松見師も言われる如く、それは本書のみでは到底論じ尽せぬ性質の企てであり、独自の場を俟つを要しよう。

『法華義疏』は周知のように聖徳太子の三部の經疏である所謂三經義疏の一つであるが、近來学界においてはその中の『維摩經義疏』について、太子の親撰であることに確証がない点に問題が提起されているようであるが、この『法華義疏』に関してはおかされる問題は附随していない。のみならず今日知られている聖徳太子の筆蹟の唯一の根拠は、宮中に伝わるこの『法華義疏』の親筆本とされている位である。

元來『法華經』は大乗經典の中でも、中国・日本の仏教史を通じて広汎な影響を及ぼした点よりしても、教義上の重要性は測り知れぬものがあり、ひとたび天台宗が興つてその所依の經典とされるや、中国・日本に於て夥しい教に上る註疏が生れた。日本の鎌倉時代に興起した各宗の開祖が、叡山の天台法華宗にその教学の淵源を仰いでいる事実や、現代の仏教系新興諸宗派がその所依の經典としている事実を勘考しても、この經典のもつ意義の大き

る事が知られる。しかも、日本仏教の祖と仰がれる聖徳太子が、広く大乗經典の中から選んで、自ら註釈を加えられた三經義疏の一をなしている点に鑑みても、現代の仏教学徒たるものの決して無視し得ぬ經であることは明らかである、しかしながら、浄土真宗の宗義学の立場から見た『法華經』は、一つの大きな謎を孕んでいる。それは、宗祖親鸞の主著『教行信証』には、この一般には大乗至極の經典と称され、また『觀無量壽經』と表裏の教えとさえ言われる『法華經』が一句も引用されていないばかりか、教学的にもこの天台の祖典の教義内容が全く無視されている観があるからである。この事実の意味する所は現代という時代に生を享けている浄土真宗教徒が解明を迫まられている大きな問題と言わなければならない。これはそのまま宗学の独自性解明の問題に密接な連がりをもつからであり、また今後の日本の宗教界の一般的風汐を予測する鍵ともなるからである。

松見師はこの『法華義疏』の講述に当って、その開講の辞の中でこの問題に触れ、同師なりの見解を提示している。それは『法華經』方便品の重要主題たる一仏乗の開頭が、源信の『一乗要決』中の『勝鬘經』の一乗の積を通じ、更に宗祖の本典中行卷の「一乗海の積」乃至は眞実教は誓願一仏乗なりという決定に及んでおり、従つて宗祖は『法華經』に決して無関心であったわけでもなく、また忌避されたわけでもなく、一乗教という概念の中に於て法華を見られ、「誓願一仏乗」なる言葉の中に『法華經』をも包摂せられたのであらうという見解を呈示している。その他の見地からする見解も一般には多々あると思われるが、かかる無視し得ぬ重要問題に対する問題意識の呈示と一つの独自の見解が本義疏

に深く参入した著者なりにこの様な形で示されているのも、本書の特色であろう。

又、同じ開講の辞の中に著者の日本仏教思想史観が簡明に記されている。著者は太子の二大精神たる万善同帰と仏寿長遠こそが、太子と宗祖とを直結するものと考えるが、他面伝教が両者の媒介的存在であるという見方に立っている。その根拠を宗祖の『現世利益和讃』の中に見出し、その心の中心をば息災延命と七難消滅という当時の日本人の代表的願いの中に見ている。この二つの願望の充足が念仏の中にあることを示し、現世利益の名のもとに念仏を称えしめんとしたのが宗祖の大悲の精神に外ならなかったという。後世の天台に見られるような祈禱的色彩が極めて薄かったのが伝教であるが、伝教こそが太子からの伝承の媒介者にならぬという見解である。同時に、宗祖が本典に『法華経』を引用せられなかったのは、法華一乗の精神が、間接的に中古天台の本覚思想を通じて宗祖の『現世利益和讃』として表現せられたがためではなかったか、ということであり、これは著者のこの問題に対する一つの解答と見られよう。一乗法華の精神から見るとき、第七祖の法然よりは、むしろ伝教が太子と宗祖の間の枢要な地位に立つ、という著者の太子・伝教・宗祖という三聖からなる系列に示された歴史観は注目されてよいであろう。

本書の構成は十三章から成り、就中、著者が最も力を注いでいると見られるのは、第二章方便品である。これは太子が特に力を注がれているからであり、また著者も太子に従って方便・安楽・寿量・普門の各品を殊に重要視している。この様に重点的な取扱いが為されているため、本書の章の分け方は、『法華経』のそれ

と必ずしも一致していない。

第一章の序品に於ては、著者は太子が『法華経』をどの様に見られたかを探り、義疏開巻の文から、太子の『法華経』観は万善同帰と仏寿長遠の二句に尽きるとし、前句の肝要をば『勝鬘経疏』の「行善の義は、もと帰依にあり、今広く万行の道を明さんと欲す。故に、帰依をもつて首となすなり」や「若し三宝に依らずして受戒せば戒は堅強ならざること綵色に膠無きが如し」等に示された太子の見解に照して、万善同帰の理の根源には帰依の精神があることに注意せねばならぬと述べ、また後句については、ここでは太子が詳述を避けられた旨を記している。更に著者はこの第一章を二分し、(一)経題、(二)序品に於ける諸問題、とに充てているが、経題に關しては、法雲・天台等の中国仏教の代表的解釈たる「蓮華は妙法を喻えたもの」という見方に加えて、原典による語学上の見地からする本田義英博士の「妙法即蓮華ではなく、蓮華は妙法の実踐者をあらわすもの」という説を紹介している。しかし著者は両者の關係は研究の余地ありとしている。疑いもなくこの経題の中核は、太子の「此の物の性為るや、花実俱に成る。此の経は因果雙べ明すこと義彼の花に同じきが故に、以て譬と為せる也」に極まると言えよう。著者はこれを「太子の意では花は因、実は果である。果とは莫一の大果であり、因とは万善である」と解説しているが、ここにさきの二説に対して独自の見解を表明している。すなわち太子の義疏の「花有れば必ず実あるをもつて、善有れば必ず仏と成ることを表さんと欲し云々」に注目すべしとして、「花は善であり、実は仏である。従つて(太子は)蓮華を単に妙法の譬とのみ解しておられなかつたように思われる。なぜなら、

善とは行ぜられるものであって単なる觀念ではないからである」と述べ、太子の経題は全く独自のと称すべきかどうかは問題であるが、むしろ大陸の伝統と相通するものをより主体的に現実的に、即ち自己の体験として積されているところに意義があるとしている。(二)の序品に於ける諸問題は、太子に於て如是が一乗の立場を指すものであったことへの言及と、太子が法華會座の菩薩を「衆生の所依なり」と言われたところに太子の面目があると著者が指摘しているのが主たる内容である。

第二章の方便品はこの著全体の主体的部分と称してもよいであろう。著者はこの章を七節に分つて、各々詳述している。

先づ(一)方便、の項に關し著者は、この品は本来、後半本門の中心が寿量品、とせられるに對し、前半迹門の中心と見做される品であるが、『法華經』全体の中心でもあるとして、その理由を、方便品は『法華經』の中心思想である「法」の意義が明されている法論であるからであると述べ、又、一大事因縁と言われるのは、要は「法」の意義の開示に外ならぬからであると説いている。そして、方便品を「真実と方便とを開明せる一章」と性格づけ、智顛・太子・法雲の方便觀を順次紹介している。著者は「法雲は方便を真実の理により顕わされたものとするけれども、智顛は方便の上に現に真実があるとする」と法雲・智顛の方便觀の相違を對照させ、「これらと『昔日の三乗教これ實は真実一乗の姿である』が故に、「この方便品をば方便実相品と言ふべきである」という太子の「方便実相」という方便觀とを比較する。しかし、著者は太子の方便觀が法雲よりもむしろ智顛や嘉祥のそれと相通するものあるを認めつつ、太子のそれが独創であると断ずることは差し控え

今後の課題に譲っている。

第二項の「法」については、著者は方便品の教える「法」は「智慧」と「方便」という二つの概念として説かれると述べ、註釈家が方便品の註釈についてはこの「智慧」に注目して、多くの言葉を費している事実を挙げ、法雲・智顛・太子の説を紹介している。ここでは太子の指南書である光宅疏に多くの頁が割かれ、先づ光宅の『義記』の中の実智、智慧、方便智、權智の四智説を紹介しているが、太子が「この四智は唯一の聖智に他ならず、四つの名あるは智と境との相互の關係によるのみ」と決せられた事実を指摘する。又、著者は『文句』の文を引いて、智顛が光宅の權実二智が離れていることを批判し、理と教とが離れてあるというのではなく、理・教の何れか一方をとれば他も必ずそこにあるとする『文句』の立場を對照せしめている。そして『文句』の「道中を実と稱し、道前を權と謂ふなり」に注意を喚起し、權実二智が一道であること、一道とは実相に他ならぬこと、これをば太子は一つの聖智と示し、現実の相そのものの上に聖智を見られたのであると述べている。しかし著者は、智顛と太子の見方との間にもやや一線を劃し、「太子の考察は智顛に極めて近いと言えよう。然し智顛の現象自体に智慧のあり方をとらえようとしたのとはいささか異なると言わねばならない」と述べているが、この辺は更に明確に詳述してほしかった処である。

第三項の諸法実相、に於て著者は先づ羅什訳『法華經』中の所謂十如是の文を紹介し、諸法実相は法性と同義であり、縁起の別名であり、和辻博士の言われる如く「空」に外ならぬことを明らかにした後、法雲・太子・智顛三者の諸法実相觀を列挙する。ここで

著者はいわば光宅の諸法実相観を分析的であるとすれば、天台のそれは不二的であり、更に太子のそれは天台の考え方と類似と云うよりむしろ同一であると結論しているのが注目される。

次の(四)十如、について著者は「学者の述べる如く存在の分類ではなく、存在の要素と云うべきであろう」(二十九頁)と云うが、要素と云う言葉は正鵠を得ていないかに思われる。これは「仮設」的でなく、「実体」的に受けとられる懼れがあるからである。範疇などは如何であらうか。尚この項に於て著者が所謂三転読文の繁瑣哲学への論及を避けたことは当然の処置と思われる。

何となれば、三転読文は羅什訳『法華経』と天台宗学にのみ係わる問題であり、太子の義疏の問題とは無関係であるからである。事実著者も指摘しているように、太子自身も十如については一言もふれておられず、賢明にもそれを「愚心及び難し」の一語で一蹴してしまわれているからである。

(四)の五千退座、では著者は木村博士説、和辻博士説、天台の説、太子の説を紹介し、経文の意に疑義を表わした前二説をとらず、「威神をもて去ら遣めたまふ」とした智顛の説と、「但其の罪業を以て自然而退き」と解した太子の説を取り上げ、「罪業の自覚によって退いたと考える方がよりふさわしい」という見方に賛意を表している。

(四)の四仏知見、は開・示・悟・入の四位に表わされた仏知見の意であるが、項目の表題としては寧ろ開示悟入の方が分り易く、かつ適わしいのではあるまいか。ここでは著者は天台・光宅・太子三者の開示悟入観を列挙し比較するが、一大事因縁・開示悟入を仏寿の長遠と解したのは大陸諸師に見ざる太子独自の發揮とし

て注目している。

(四)の一仏乗の問題、で著者は先づ經典の文を梵本と対照させて吟味した拳句、光宅・天台・太子・嘉祥の四者の説を挙げているが、この一乗・三乗の問題は次章の内容と深い関わり合いをもつので詳説は次章に譲り、同じく四車家に立つと言われる智顛と光宅の見解の間の明解な勘考は特になさず、太子の釈の引用が主となっているが、その解説は、惜しむらくは、この辺り明快とは言い難い。

第三章と第四章は經典では譬喩品第三に相当し、殊に第三章は(一)の索車が中心を占めているのは当然と思われる。(一)の虚妄と眞実、の項では著者は太子・光宅の両者の見解が密接な関連をもっている事を引文によって立証し、更に太子が「如来は本来已に大乘の道力有りしかども、但衆生の機尽く受くること能はざりしが故に説きたまはざりし也」とその『義疏』にも述べられたように、太子がこの問題を「機」との関連に於て考えたことや、善を与えて惡を奪うが故に虚妄ならずとしておられることに注目を促している。(二)の索車、は独り譬喩品の中心であるのみならず、各宗の碩学の『法華経』観を決する重要な問題を孕んだ箇処である。しかし著者はここでは三車火宅の解明に当って、所謂三車家、四車家という固定した立場からは検討を加えず、むしろそれ以前の問題として、太子、光宅、嘉祥、天台の四者の見解を引き、吟味を加え、その問題点を明らかにしようとしている。この箇処は微妙な論理が多く、各家の立場を正當に理解する為には、相当深い思索と専門的予備知識とが必要とされる。しかし、三車家・四車家の議論が単に徒に複雑なスコラ哲学ではなく、大乘仏教思想の

生命にも密接に繋がりをもつ重要な問題を巡っていることを、広く一般の読者に納得せしめんがためには、単なる引文の意義の解説以上の、一層広い視野に立った思想的究明が必要であるように思われる。

第四章の長者窮子の譬喩、に於ては信解品の中に示されたこの譬喩物語りが、三車火宅と同様に、仏と衆生、父と子の關係を教えたもので、これら両者は共に一乗の道の上にあつて相對立するものではないことを教えたものであるとして、經中の本文を掲げ、光宅・太子・智顛の信・解觀を紹介している。尚この章末尾に著者は、天台智顛の五時説、即ち、華嚴・阿含・方等・般若・法華涅槃の五時に一大仏教を分判したのはこの長者窮子の物語りによる事実と言及している。この章以下で著者が比較的詳説しているのは、第八章の安樂行品と第十章の仏寿長遠（寿命品）である。

第八章の安樂行品は迹門流通の終品第十四を扱い、著者は先づこの品が何故、四要品の一つに数えられたかを明らかにする。先づ太子の法師品での註記「諸の修行の中、此の經を聞くに如かずとなり」を引き、『法華經』の修行は要するに「聞」の一字にあることを太子は教えられたのではないかと推察し、『法華經』の行は『法華經』を聞くことから出発することを示し、次に法師品の經文「是の經典をきくこと得ることあらん者は、乃ち能く菩薩の道を行ずるなり」に照らして、それは菩薩道を行ずることに他ならぬとする。この品に挙げられる四安樂行とは、身、口、意、誓願であるが、『文句』は安樂行を解して涅槃道とする。そして涅槃（果）を意味する安樂も、道（因）を意味する行も俱に樂であると解

し、安樂行こそ涅槃道即ち成仏への道と考えられる故、著者はこの四安樂行の外に『法華經』の菩薩行はないことを明らかにし、この安樂行が悪世に於て新発退墮之類にとつての唯一の行であることを明言せられたのは太子であると指摘する。太子の積に依れば、身・口・意の前三行は自行であり、後の一慈悲（誓願）行は外化行であると言われる。太子は安樂行と言わずに善行と称されるが、「菩薩之道は、將に他を正しうせんと欲するには先づ己が身を正しうす、己を正しうするの要は三行に如くは莫く、他を正しうする之要は慈悲をもつて本と為すなり」と述べておられるところからして、この四安樂行をば菩薩の自利々他円満の行を統べるものと見ておられた事は確かである。著者はここで各安樂行の詳説に入るが、身安樂行の所で著者は太子の常好坐禪の積中にある「何の暇あつてこの經を弘通せん」を評し、「寧ろ坐禪による熟慮こそ、太子の立場ではあるまいか。私はこの積の上に太子の独自性ではなく、寧ろ奇異の感をいだくのである」と述べ、むしろ『法華玄贊』に表れた積こそ、太子の精神であるべきではないか、として次の文を引いている。「常に閻闍を離れて独り閑居に処するにて、初學者には応に自ら静に住すべしと誡め、久學者には身閑に処すと雖も心常に静なれと誡むるが故なり」。この「常好坐禪」の一句を巡つて、光宅は親近すべきの境と言ひ、太子は親近せざるの境に入ると言われ、この見方は太子研究者により重要視せられてゐると著者は述べ、著者は「この積の上に太子の独自性ではなく、寧ろ奇異の感をいだく」といつているが、これは「常好坐禪」という言葉の当相を捉えるか、或いは、『法華經』を弘通する勇猛心を得るための過程的行と見做すかによつて、見解の

分れるところと見られよう。「常好坐禪」を不親近処とせられる太子の内意は、必ずしも坐禪そのものの過程的意義迄も否定されているとは考えられぬが、この点如何なるものであろうか。口安樂行に関しては、著者は光宅がこれを説法行と名づけ、太子が口善行と名づけられた相違の意義にふれる。又、著者は第三意安樂行については、これは「自身の内省」を説いたものと解し、離悪と修善と分けて問題にする光宅と、止善を行善と分けて論ずる太子の用語の対照から、「光宅にあつては、善悪は相對する。然し太子においては善悪は統一されている」と特長づけている点が特にここで注目される。第四誓願安樂行のところでは、著者は特に光宅が、慈悲行について「安樂の相」ということを述べている点に注意を促がしている。

第九章の從地涌出品では、著者はこの品が本門の中心たる壽量品第十六と不可分の關係にあることを述べ、その關係とは、地涌品の間に対する答が壽量品である旨を記している。そして地涌の菩薩とは長遠なる生命の中にあつて道を求めている人類を指すものであろうか、と述べる。

第十章の仏壽長遠、は壽量品第十六に相当するが、著者は先づこの品で、迹門の中心である方便品の如く、三請の形が示されていることに注目し、兩者の區別を、前者が三止に対しての三請であるが、後者は三信(三誠)に対するものであるとする。又、両品の中核たる仏知見と仏壽は衆生の最も聞かねばならぬ点であり、出世本懐も衆生に仏知と仏壽を与えんとすることであり、それは畢竟、衆生の最も求むるものを与える仏の出現を言ふと述べている。この「最も」とは「本来」の意であらう。然る後にこの

品の諸種の問題点——「秘密神通の力」、「六或示現」、「三身の關係」、「良医の喩」——が逐一挙げられ、諸師の釈と共に詳論されている。著者は特に久遠の仏に關する天台と太子の考え方を對照し、智頭が三身に於て久遠の仏を見ようとしたのに対し、太子が三身を通さず四種の方便・四種の神通を久遠の仏の在り方として理解された点を指摘する。この様に太子は久遠の仏壽を単なる永遠とか、絶対とか解せられず、菩薩の道を行じて成じた壽命、という風に、抽象的な理解よりはむしろ現実的な理解をされた点に、太子の久遠の仏壽觀の特色を見ている点が注目される。又、經中の「良医の喩」と仏壽長遠との關係を論じて、この喩は必ずしも仏壽長遠を説くのに充分ではないとしながらも、尚、死を示すことにより不死を示めすのであるからこの点は重要なのであると押えている。

第十一章は經では分別功德品第十七から妙音菩薩品第二十四迄に相當するが、ここからは流通分に入る故、一括して取り扱われている。著者も述べている様に、この品以下は全般的に太子の独自の釈は極めて少ない。

但著者は藥王本事品第二十二の「若し女人有つて是の藥王菩薩本事品を聞いて能く受持せん者は、是の女身を尽して、後に復た受けず。若し如来の滅後、後の五百歲の中に、若し女人有つて、此の經典を聞いて説の如く修行せば、此に於て命終して、即ち安樂世界の阿彌陀仏の大菩薩衆の圍繞せる住処に往いて、蓮華の中の宝座の上に生ぜん」の文を太子がどう釈されたかに関心を促しているのが注意される。ここで太子は「女身を転じて無量壽國に生るることを明す」と述べられているが、この点をば擬然は「九

品往生の意」に解し、嘉祥も多少触れるところあるものの、光宅や天台などの全く注目しない点であるとし、著者は特に太子が經文の安樂世界を無量寿国と語をかえておられることを取り上げ、「之は何でもないことのようにあるが、(中略)この無量寿のことは例の天寿国の問題を考えるおりに注目すべきことであろう」と述べ、「ここに太子の万善同帰の主旨も徹底するのではあるまいか。」と結んでいるのは、著者の燭眼を示すものであろう。

第十二章の觀世音菩薩普門品は經典では第二十五品に当り、古來四要品の一つと教えられ、また、『法華經』から独立して『觀音經』として一般に知られているが、著者はここでは、先づ「音声を觀ず」とはどういうことかという疑義を呈出し、南条・本田博士の説を勘考して、結局、「觀音が衆生の音声を觀得すると解しては意味が通ぜぬから、やはり衆生が自らの称名により觀得し解脫すると解すべきものと思われ」と述べ、法雲や智顛等の説をここで吟味している。

一般に『法華經』の研究註釈書が汗牛充棟ただならぬ中にあつ

て、この太子の『法華經義疏』は特に日本仏教史上最初の独自の註釈という点から甚だ意義深いものである。しかし乍ら太子の『義疏』に関する思想的解明を企てた書物が極めて稀である今日、この松見得忍師の『要義』は洵に貴重な文献であると言ふことができよう。これは元々安居の講本として作成された關係上、多くの誤植があるが、これは本書の宿す思想解明の書としての意義を損う性質のものではなく、今後の改訂を期待したい。なお初学者の爲、法雲の『義記』の引文の著者なりの読み方を指示して頂ければ、一層近づき易いものになるであらう。読者はこの書から、太子の独自の思想を学ぶ上に多くの貴重な示唆を得るであらう。

又、『大經』、『法華經』の関連等をも勘考する上にも、必須の資料であり、特に宗学専攻者にとり、積尊出世本懐の問題を考える上に、無視することの出来ぬ論疏であるということができよう。著者の御芳苦に深甚なる謝意を表したい。

(東本願寺出版部発行 昭和四十一年七月 A5版 一二三頁)